

慕氏兵論

二編

四三

113

933

4



413  
933  
4

慕氏兵論第二編應用兵法卷三



大正五年五月  
花房仙次郎氏

曾田勇次郎 譯

第九十五章 欄門の戰軍兵若くは大衆庶か  
る都會よかゝて唱帥者即所謂土賊師よ由て指  
揮せらるる土寇の武備せる民黨よ對して守禦  
するを要せんや為め哀を已得ざるよ至てける  
と死よ直よ武庫と兵舎とを以て番家とを  
警固し且強むるを要せよ以て冀ハ斯る都會  
よてハ其家作を常よ強めあるを以て其上都會中

慕氏兵論

二編卷之三

近くは在る街路或平地を制し且警固兵堅固か  
る宿舎は在りて兵糧および彈藥の蓄藏を見置  
た得る此の如く緊要なる或る部位を押領する  
を要す  
都會の衆庶ある部分は在るの大なる家作も多  
分は少く為し最適當なる處にありて最速  
に守禦の地は致すを要す鼓噪所と兵舎より鼓  
噪所は通ずるの街路とありて又兵舎而已の  
出口とハ砲臺および人家の守備は由て土寇の  
點放は對して警備するを要す都會の掌令官も

其宿舎をハ武用家作の正中に在りてよく守禦  
せらるを得るし其街官の宿舎より遠く遠離  
しあらざるの家作中は止宿するを要す其掌令  
官爰に在りて其令を速し且種々ある發行兵の  
指令官の呈書を承るべき掌令官は常に數多の  
游兵を其設備は保持するを要す是土寇は由  
て攻伐せらるを得るの家作を救助するは速し急  
行し得んう為かや騎兵或歩兵の介候も諸の警  
固せる部位と通信を保つと兼て街路中の集會  
を妨ぐるべき

守禦の此の如き法式を取るに由て諸の警固せる部位其正中の部位と連結し在り且是故に各脇迫せらるるの部位速に應援せらるを得るものにして此を由ては建築を希し得るにこそ其建築を以て攻伐し移轉し至らんを為かす警固兵の兵數若し此諸部位を警固せんことを容さると死すは軍兵の見はきある所の部街をい欄門に由て都會の自餘の部分より隔つるを要し此處より擲發砲を以て土寇に在るの部街を擲撃せしむるにこそ警固兵若し都會中に

在陣せんを十分の同勢にあり得ざると死すは此所より軍兵を絞るにめ且勢て都會を圍む或は死すらざるも築造に由ておもかる出入口を強むるを以て佳とせしむる

最近くは在る護衛兵とハ常に連結し在るを要すおろして若し土寇の外より應援を得んことの恐きあると死すは騎兵を以て斯るところを妨げんことを務むるにこそは歩兵の或る應援發行兵を加ふるを大に利用かすと為し得るに第百九十六章土寇若し都會中に欄門を備へ且

家作を守禦し設置しけるの騷動し都會を外  
より來る軍兵し由て強迫するを要すると此し  
ハ其都會を務て全く困むし由て此を最よく  
成就せしむる衆庶か都會も屹と飢渴し由て速  
服従するし至る處し志しとも此の如く困む  
し軍兵の大なる員數要用ありとせ且殊し又  
騎兵を要用とせ

摸やう若し此の如く都會の人民を兵の強迫し  
由て部下し致さんことを要すると此し志し為  
し規律せる軍し就の如く同一規矩を取る

を要し其上最多く土寇し與しける都會の部  
街を擲發砲と火箭とを以て射撃するを要し志  
する間し強迫の攻伐ハ羅郭の最弱部分し對  
向し其羅郭ハ以前射破るを要しけるものあり  
此し志し為しハ少しも總門を撰ふを要し志し  
はいつんとかきハ他の部位し都會中し押入  
し以て環行し得るの此方向しハ土寇強し守禦  
術を為しけるからむし志し

放砲し由て此部位し十分なる空隙を得けるや  
否し攻拔し移轉し至る處し志しして此攻拔若

一成就せるとたよの攻拔縦隊直よ蔓延せるを  
 要せよととも都會の各押領せる部分ハ直よ  
 守禦の地よ致し且警固せるを要せ都會の形勢  
 若しこを肯せるとたよハ今多の脇側よ攻  
 伐を募り且擁環して土寇の居處の方向よおの  
 て攻伐せるを要せ  
 欄門ハ以前砲類を以て射撃しけるの後こを  
 攻拔せるを要せ或る狙撃銳兵ハ近くよ在る宿  
 舎よ棲込し且其處よして欄門の近くよ在る  
 人家の窓牖よ射發せ下知せる合圖よて攻拔縦

隊欄門の方よ急行し且銃槍を以て守禦兵を攻  
 伐せ攻伐若し成就せるとたよと土寇よ對して  
 直よ欄門を警固せこをよ反して攻伐の敗績せ  
 るとたよと第二の縦隊よ由て直よ其攻伐を反  
 覆せ欄門よ傍て警固せる人家よ此舉よ乘して  
 他の發行兵こを攻拔せ此時よ方てハ破裂砲  
 と火藥を納せる囊とを具せるの或る士卒ある  
 かてこを閉塞せる戸闔をこを以て裂開し  
 りむろ為かて其成就しけるや否よ此發行兵よ  
 人家よ押入て且其人家警固若し守禦しあると

死ハ銃槍を以て此を殺害せ就中層屋と窓  
 藏とを審り且防火壁を打破る此近く  
 在るの人家に届らん為か攻伐兵若く頑固  
 抵抗せる大なる家作の近傍に到ると死ハ  
 其家作を地雷火を以て其家作を破裂せしめん  
 ことを務む諸の押領せる人家を警固し志し  
 て復ひ守禦の地を致すを要す此固く其處に  
 據を占んる為か又攻伐縦隊に發向せる方  
 て堅固なる退陣に配慮せるを要す  
 此畧街路戦に就て用ふる一般の規則か

此地砲と擲發砲とを以てせるの射發と擲發と  
 ありて殊に火箭の使用とい衆庶なる都會に  
 かゝて多の戦士を費し得んこと志しかかる  
 土寇を静めん為りの或る方策なる處に志か  
 してたどへ此に由て志するに又此都會の  
 一部分火焰に焼失し得んといへども志し  
 も古瓦の累積といふかる土寇法令の威勢に背  
 いて罪せらるるかを告諭せるの例証とある處  
 一著明なる欄門戦にホンレイトルト氏の著  
 書(クコイペル氏に由て翻譯せる)テル

スラッセン カンムフ中にあるか

第百九十七章 森林の戦を獨立せる發行兵は  
由て甚稀きは成るか此戦を守禦兵其陣地を  
強めむの爲と且森林を其軍旅の戦備の支柱  
處として供せしめむの爲とよこをを用ふるの  
野戦は發ること最多しとよこをよ就て注目せ  
るを陣地の近くは在るの森林を唯よく警固  
し且よく守禦せるとたよ而已利あることよあ  
るか敵若し茲は一固く據を占めけるとた  
よハ蔽陰して其處よ我軍兵を襲ひ得るか

志あるとたよハ森林の戦又十分は用兵法の現  
在の方法と符合せ其方法ハ歩兵をして其火兵  
をよく用ひしむることの競進よあるか志あ  
して輓近の軍よかめてハ森林の所在の周邊よ  
て頑強に戦はるさの野戦少かよと  
第百九十八章 森林を警固せる以前よハ守禦  
兵よを監察せるを要せいつんとかよハ諸の  
森林ハ守禦は適當せるよあらさよハか此監  
察よ就てハ専ら次の事件よ注意せるを要せ  
第一よハ森林の蔓延よ注意せるを要せよ其



蔓延し従て幾多の軍兵を守禦し要用と為せし  
を定めんを為さず其他森林の周囲壕塹し或土  
堤うし由て周遷しあるを注意せしを要せし此  
の如しハ守禦兵し甚便宜かすしとせ森林い  
る樹木より成るし且其森林いりし繁茂しある  
し注意せしを要せし森林を斷絶せし道路い  
るしあるし且其道路の連結いりしあるし注  
意せしを要せし此の如しと重密なる森林し就て  
大し緊要のものかすしとせ地面悉く通行せし  
るし且森林中守禦し得るの小川および人家や

或結束せる游兵を布列せんし開濶の地位やの  
如し要害あるし注意せしを要せし終し此利害  
守禦兵の爲めいかし懸隔しあるを判断  
せんを爲し周邊の地勢の形状を監察し此監察  
の後し先つ森林ハ注目せる目的し適當しある  
し且此を幾多の軍兵を處分せしを要せし  
を算し得るしとせとも森林の各守禦しハ此  
のことと監察を先とせしを思ふかき多  
の時期しあつて此を要用とせしの時日不足  
あるを慮し且去るしとせしを森林の兵法の功利

を判断し且陣地の他の部位を弱めることかく  
幾多の軍兵を欠け得るを迅速に算用せん  
為の其正に明断をらて何事も守禦兵に遺漏  
あるにあらざるに志かるとは、其他は一定  
せる軍兵の指令官に森林を警固し且守禦せん  
ことを委任しあるか

歩兵に森林の守禦を以て奉命せるの主兵か  
とを志ししては多の狙撃銃兵を加ふる  
を要用か、と砲類一二砲に森林の守禦は多  
く有用のものなるを志ししては、若し大か

る道路の森林を貫通せるとは、騎兵の或る  
ペロトンスとを以て利用しあは得るか、森林  
の縁の警固を履け部分の各二歩の距離は、歩  
兵一口を要用とせしことを算せしむるも  
此算定に軍に於て履違ふを志しして森林  
の守禦を以て奉命しあるの指令官多分は少  
の軍兵を以て其課業を完成せしむるを要し  
森林の縁の守禦兵は、コムパクニス縦隊に布  
陣せし各縦隊の一部分は、最初餘り強勢に  
得しして森林の縁に撤兵陣を布せしむる敵

若し近よて來るとは、此陣先つ強めらるる自  
餘の部分へ結束し、助兵をかてて供を盡し、此助  
兵も即少も撤兵陣と同じ同勢にあて且勢て多  
く敵の眼目と點放とを遁るゝを要す、志の色と  
も又撤兵を救助するゝ直に到り得る所とよこ  
やうに其近くは在るを要す  
森林の縁を勢て永く守禦するを要す、志の色と  
攻伐兵若し茲に押入るとは、助兵を以て茲  
よて屢こを驅除するを要す、森林の縁を失ふ  
とは、森林の諸兵法利を消散す

游兵も別て森林を斷絶する道路は在り且決戦  
の時刻は於るゝあらざるゝ絶て戦闘は與り得  
ず本游軍の布置は森林の蔓延と形勢とは關係  
を盡し、小なる森林は在ては此游軍其後には在  
り得ざる千八百三十一年ホルレン人々ロクオ  
ウ地の戦はかゝてエルセン森の名譽の守禦は  
就て為せしること大なる森林は就ては此游  
軍自餘の軍兵と通信を保ち得決戦の威勢を以  
て前方は森林を脱出し得且種々の縦隊はかゝ  
て後方は運動し得るやうに此の如く布置する

を要す此時は方て森林の側方に布置せざるを要  
せざるや否とて地形は關係を盡す  
森林の出入口を射防せんを為さば森林外攻  
伐兵の環行せる運動を妨げむる為は歩兵と  
騎兵とを以て蔽護せるの砲兵を森林の側は布  
置す砲類一對の砲は砲兵或る時ハ此部位よ  
り敵を衝た得又或るとはハ彼の部位より敵  
を衝た得るやうは森林中より道路森林の縁は  
近く且ここは平行にあるとてハ森林の縁の  
守禦は就て便利はここを用ひ得とてとも砲

兵も同一一部位は餘り永く滞留し得ざるか  
ここは強勢なる敵の放砲は由て黙止せる至らざ  
らんを為さば森林中より亦さるる砲兵は  
總して砲兵の地位は大きなる道路の近傍は在る  
處はここは攻伐の疑は部位を守禦せんを為さば  
此攻伐の部位は大きなる道路と多く平坦の地位  
とあつて森林の縁の突出せる部分かやとて  
ここは切所の最單純はある處は所の此弱は部  
位を強むるを要す其部位はここは數多の散兵を  
以て守禦せるを要せると兼て狙撃銃兵其點放

を以て此強むる部位を射防し得るやうに此の  
ことくこを布置するを要す

森林の出口に接し布置せるの小なる騎兵へ口  
トンスを動きへ不意の攻伐に由て敵の撒兵を  
逐却せしむることも是れ就ては守禦兵の  
點放を妨げざるに配慮するを要す

茲に若し小川および人家のこととて守禦し得る  
地形の限隔森林中に在るとして以前にこそ  
を警固し且守禦するを要す今若し攻伐兵森林  
中に押入り最前の守禦陣を追却し且游兵の側

面攻伐斯ることを守返し得ざればとては此  
陣上といふ物体の守禦兵に由て包截せらるる  
し且あるとては守禦を此地形の限隔の後  
に募るかす本游軍も今敵を復ひ森林より追却  
せんことを務むるを要し且こそは結束せる  
軍兵を以て攻伐するを要し

守禦兵若し森林を去るを要するとては前以  
て一の強勢なる撒兵陣後面に在る森林の縁を  
警固せしむる自餘の軍兵も今森林を去りて本游  
軍の傍に布置す此本游軍も敵の歩兵點放の及

嘉氏兵論  
二編卷之三

達の外は在るかゞこそ最尾は森林を去るを要するの軍兵を包藏し且森林より脱出せる敵の軍兵をハ榴霰弾を以て射撃せんら為かゞ  
志つとせり務て永く最後の森林の縁を保守するを要せしは是より由て敵の森林を脱出せるを妨げ且森林を取返せし至て所望を容易く為さんら為かゞ

よく施行せる森林守禦の徴候は攻伐兵の其攻伐を反覆して改むるより已を得ざるよりあり且こそより由て大なる敗亡を受けくる後終り攻伐を

廢せるを要するはとて屢強に守返り會ふよりあるかゞ

第百九十九章 森林は為その攻伐を復ひ唯攻伐兵他の方法にてハ絶て其目的を達しあはれ且森林を環通りあはれとせるとは而已正法とせるの此企は屬するかゞ

攻伐の為の廬算は森林の形勢と志しつて敵の疑しに同勢とて本つたあるを要せしを理會するより多分佯攻伐と兼行ふの監察より由て志し是とも唯甚不十分より而已こそを得るは砲

兵ハ敵の歩兵點放の及達の外ハ砲列ハ布列を  
るの十二ポンド地砲および中砲を以て攻伐を  
誘導す此砲兵ハ敵の砲類を黙止せしむるやう  
ハ爲し榴霰彈を以て森林の縁の後ハ在る敵の  
撤兵を射撃し實彈を以て壘塞を除却せ且疑ら  
くハ敵の游兵の駐留せる所の森林の此部分ハ  
榴彈を擲發せるを課業とせるかば放砲といか  
ハも強威しして且持久しあはハ攻伐兵愈便宜  
の機會を得る  
此の如くハ誘導せるの攻伐ハ其他結束せる軍

兵ハ由て後繼せらるる一陣の撤兵ハ由て成る  
かゞあつて森林の前の地形開闢ハ在ると死  
ハも小なる騎兵ペロトンス守禦兵の騎兵攻伐  
ハ對して撤兵を守禦せるを要すこゝを爲し此  
ペロトンスハ或る距離にて撤兵を後繼せるか  
ば攻伐ハ森林の縁ハ對しコムパクニーン縦隊  
ハ由て成り且砲類ハ由て應援せらるるハ縦隊  
ハ撤兵の攻伐を應援せんう爲し守禦兵の結束  
せる軍兵と戰鬥を始め且こゝを遂げんう爲し  
二重の目的を具す

森林の前地形若し開闊あると死しハ撒兵射發を以て永く駐留せるを要そこを蔽蔭しある守禦兵の為し過多し害あるものか是故し其撒兵務て速く銃槍を以て攻伐せしむしこし就てハ此兵助兵し由て應援せらる此攻伐若し成就せると死しハ直し撒兵結束せる軍兵し由て交代せらるく追て固く森林の縁し據るを要そこし反して其攻伐の敗績せると死しハ撒兵務て速く敵の點放を遁りし且尋て生軍兵し由て攻伐を改むるし最多の速度を以てし森林の縁

の一部分を押領し在や否し結束せる軍兵其部分中左右し蔓延し且撒兵ハ敵の何所し復し根據せざらんし為し森林中烈く是を従ふるは此舉し乘し道路を縁て森林中し押入るのバタイロンス縦隊ハ同やうし此目的し加功せるを要し去りしとも守禦兵の游軍しを追却せんことを務むるは配慮しあるを要し森林中大かす開濶の地位してハ騎兵追従し與し得其騎兵此時し適宜の距離して歩兵を後繼し去りしとも不時しハ森林し馳入らざるとしいか



んとかきハ斯ることの大なる騷擾に至るの誘  
導を為すを急げよいか  
砲兵よ就てハ或る砲直よ歩兵を後繼し得て是  
森林中警固せる地形の限隔よて攻伐よ用ひん  
る為か砲兵ハ游兵の自餘の兵と俱よ森林を  
過る要道を縁て後繼せよ  
守禦兵の森林よ追走せらるるや否よ最後  
の森林の縁よ尚警固し在る敵の撤兵を務て速  
に追却せるを要せよ騎兵と砲兵敵を追從  
得んる為か砲兵よ森林よ脱出せる以

前よ森林戦よ由て頽敗せける班次をバタイロ  
スニ改復せるを要せ  
著明なる森林戦は千八百零七年フリエトラン  
ト地の野戦の前ソルラケル森の戦と千八百零  
九年の軍役中トハン地よ於る森林戦とか  
そ兩戦ともよミリタイル コンフルサチオン  
ス レキシコン書中よ記載せられたるに  
よあつて千八百三十一年コロクウ地の戦よ  
あつてエルセン森の周辺の戦あつて其軍役  
の記者ホン スミット氏の説話しける所あり

第二百章 生籬の周邊は為その戦闘は多分園  
およひ畑は由て環囲せる他の地形物の周囲は  
生籬を以て囲むの此戦闘と連結し在るか  
生籬は歩兵の撤兵を以て警固せるか其同勢  
を警固せるは生籬の蔓延は從て規律を  
通常は五歩は撤兵一歩を要用とせることを算す  
此開載唯一般の規則而已あることハよく説示  
せざるを要すいゝんとかまハ生籬の形勢大は  
ことと感通せることあるは是ハか  
押通るは是らざるの生籬は尚蔽蔭はも尚壅塞はも

からざるの薄は生籬はも守禦の纒の員數を  
以てよく守禦せらる得其上最初攻伐は露而  
あるの生籬は次の生籬はも纒は強く警固を  
るを要すこと攻伐兵前進するは方て常は強  
守禦は會ふは是れんか  
生籬の弱は部位は通常突出する隅角はと  
此所又強く警固するを要す且こと就てハ  
狙撃銃兵の點放疑は攻伐の部位を射防し得  
るやうは此のことく生籬の後は其狙撃銃兵を  
布置するは由てハ此兵大功を顯ハるは若し

こまゝ時日あまゝ生籬の前は小塚を掘り且掘  
出たる土を胸壁として生籬に對して築上げ以  
てこまを強む生籬若く餘り高くあると死すハ  
内面は段階を為すを要す急止若く此時は方て  
一の時日もあらば且こまに就て此事件の多分  
欠く急死と死すハ敵の霰彈點放に對して蔽蔭  
しあらむろ為し撤兵し生籬の後は埋伏し志す  
して生籬は小なる空隙を為すを要す此兵其空  
隙に由て點放するか其其他茲に守禦兵の種々  
かる分隊の間は十分なる通信あること注意

するを要す  
生籬を以て藩圍せるの土地を貫通する道路を  
砲兵に由てり或結束せる軍兵に由てり守禦を  
するを要す時としてこまを壅塞す  
此の如く警固せる生籬の守禦に就ては務て永  
く敵を拒むを要す志すとも隔絶せらるる  
の配慮を具するを要す志すして若く最前側の  
生籬を去ると死すハ退却する撤兵其點放にて  
後には在る撤兵を妨く急のらざるを要す砲兵に  
退却するは撤兵の運動を後繼するを要す

第二百一章 生籬を為す攻伐を確定せんう為  
 とも復又地形の細密なる監察と志すて敵の  
 戦力の布置を從て嚴に探聴とを需む別して敵  
 を環通り且此の如くして其陣地を去るに已を  
 得さらしめんことを務む應し若し是に至るこ  
 と絶て容易のこととあらざるとは強に砲  
 兵點放を助けとし生籬を霰彈を射發し且助兵  
 と游兵との布置にある所の方を榴彈を擲發せ  
 るか  
 攻伐ハ一の撤兵陣を先進せるのコムパクニ

ス縦隊をかめて成るか此攻伐ハ多分生籬の  
 突出せる隅角を對向し或最容易に押通し得る  
 の地位を對向し游兵の動作を急くあて得ざる  
 其間ハ此游兵蔽蔭して停立せしむるも撤兵  
 の第二陣ハ攻伐の成就せる方て直に追從を  
 為し或若し其攻伐の敗績せるとは直にこ  
 とを改めんを為め近くは在るを要す  
 追從せるに敵の撤兵と俱に次の生籬を過て  
 押入らんことを務むるを要す此第一の追從ハ  
 又下知を以て地形の限隔に到る迄てさやうに

遠く進ましむるを要し其處まで復故し再集を  
るか正志と比隣を生籬を眼目よす失ふ  
其生籬の後敵尚住留し得るものか正此生籬  
も同やうよそるを要す即生籬の空隙を過て押  
入らんことを覓め且此のこたくよして敵を隔  
絶せんことを覓む蓋し若し正面よおめて生籬  
を攻伐せんゝ為し已を得ざるを見ると紀よハ  
し此のこたく紀よハ毎し害のもやうあるものか  
其生籬若し次の生籬の放銃の及達中よ在ると  
紀よハ殊よ志よすし放砲よ由て以前よ敵の生

籬を去るよ已を得ざらんことを務むるを要す  
志よ志とも同くも紆路を縁て側面よ到らんこ  
とを敵よ示し且此のこたく脇迫して隔絶せん  
ことをこきよ示すを要す  
甚著明ある生籬戦もフランス國のケ子ラール  
官テルモンコウルト氏の書ラヘンターエ  
トマタメ中よ見ゆ

第二百二章 丘陵の周邊よ為し戦闘も通常守  
禦兵其陣地を大強めんゝ為め其軍旅の戦陣中  
丘陵を占領しけると紀よ或其陣の翼の一を丘

陵は據托せると死のふ成るか

丘陵若く充分こまう為ふ供を盡くあらんと死  
ふ其丘陵の守禦兵敵の諸運動を實檢し得る  
死やうは廣に展眸を具有せるを要す此守禦兵  
は其軍兵敵の點放の功を纔に受く盡くあるや  
うふこまを蔽陰して布置し得るを要す志かま  
とも守禦兵自身へ其火兵をよく用ひ得るを要  
す其上丘陵を乘るふ方ても攻伐兵の疲勞し且  
騷亂しおめて丘上ふ到らんことく又こまは由  
て其攻伐兵の容易ふ討返さま得んことく大

は緊要のものかまと

諸の丘陵此利を具ふるふあらはれいふんとかま  
へ其利自然全く丘陵自己の形勢は關係を盡け  
まへかま其形勢ふ就ても傾覆の多少の急峻と  
丘陵の方ふ通達せる道路およひ小徑の員數お  
よひ多少の任用と上面の擴充と志うして周邊  
の地勢の形質とを第一ふ目的とせるかま傾覆  
若く敵の脇側の方ふ峻くあま志うして攻伐兵  
永く守禦兵の眼面と點放と露面しあるを盡  
やうふ一の蔽陰物もあらさると死と道路若く

上で難くして且僅の人数にて上る處くあること  
砲と若く上面に守禦兵を布列せんう為に十分  
かる隙地のあると砲とあつて周囲の地形丘陵  
を兵法にて環連するを容さくると砲とよハ  
其丘陵守禦兵の為に甚便利かる處に  
第二百三章 守禦兵若く時日の斯ることを容  
るると砲とよ切所と壅塞と砲臺とあつて築  
造とよ由て道路を守禦せんことを務む處に  
あきともここは又茲に復ひ多分勇氣の希望に  
屬せしむ且ここを就てハ其守禦兵最大に容易

砲動作を望む得るやうに此の如く其軍兵を布  
置せんことを多分心得あるを要せしむ  
此時に方てハ砲類丘陵の緩に傾覆を射防し且  
殊に丘上の方で遠するの道路を射防し得るの  
此部位にことを布置せしむともここを就て  
も兼て其砲類敵の放砲を纔に受けしむあや且  
敵の潜隠してあつて屯集し得る處に深谷或  
谷底とからひよ又峻に傾覆し就ては丘足とを  
側傍陣地より砲類を以て射防し得る處にやう  
に遠く退却して布置せしむと兼て砲類を退却

そのを要するに配慮しあるを要すこは斯るこ  
との要用にあり得るや否よこを施行せしむ  
歩兵の撒兵とこをよ加ふるに務て多の狙撃銃  
兵と溝澮と隘路とをよりて傾覆およひ丘陵  
の突出せる部位とよわめて各物体の後よ布置  
せしむることも毎に放砲を妨げざるやう此の如  
に布置せしむる結束せる歩兵を攻伐兵に見らしむ得さ  
るはとさやうに遠く丘陵の峯の後よ在るを  
若し一の敵の騎兵攻伐をも恐るゝを要せざる  
とた且地形稀よは茲よこをよ協ふとたよ

歩兵横隊に位列し或よく一部分に横隊且一  
部分に縦隊に位列せしむるは其の功を  
若し或る騎兵を丘陵上に致し得るとたよ此  
騎兵其處よて擾せしむる功を見しむ得しむ斯る  
ことハ千七百九十七年リホリ地の山上よてケ  
子ラール官ラサルレ氏の騎士の顯しけるる  
こととたかす  
第二百四章 守禦兵の戦闘よ就てかよ注意  
せしむるあらんよ敵の縦隊の丘上よ來し得るの  
道路とをよりて緩に傾覆とを放砲およひ撒兵



點放よ由て強く守禦せるよあるかぞ撤兵も其射發を敵の攻伐縦隊の先頭よ對向し且狙撃銃兵らおビシーレンよ對向せ砲兵の蔽護よ供せる歩兵の部分ら其撤兵と狙撃銃兵とを以て敵の撤兵の砲類よ近よで來るを妨くるを要せ志かきとも若し攻伐兵よ丘陵の頂上よ達せること成就し得ると記よ守禦兵の歩兵先つ一砲聲を為しけるの後其攻伐兵よ馳向ふを要せ且ここよ就て重強猛銃槍を以て重強猛の攻伐兵を丘陵よ追却せんこと此歩兵よハ多分難記

ことよある處のらさるとを  
守禦兵の騎兵と攻伐兵の丘陵上よ蔓延せん  
欲せるの時刻よここを攻伐し且追却を願し追却しさる攻伐兵ハ結束せる歩兵を以てここを從ハ凡といへとも志よここも唯歩兵と砲兵とを以てここを射撃し且其後復ひ守禦兵其以前の陣地を取返す而已ここをスハニ一地よかわてインケルス國の歩兵フランス國の攻伐縦隊よ對して多分首尾克丘陵を守禦しけるを此方法よて為しぬ

幕氏兵論  
二編卷之三  
三

第二百五五章 攻伐兵ハ敵の占領せる丘陵を攻  
伐せるの以前ハ丘陵を監察し且守禦兵の同勢  
を探聴せんことを務むるを要せし其廟算を  
確定せんヲ為かば若し該ハ近傍ハ在る丘陵よ  
リ砲類を以て守禦兵の陣地を射撃せんヲ為ハ  
適當せるの丘陵絶て近くハあらざるとはハ  
攻伐兵丘陵の上而ハ通せる道路の一を押領し  
けるの前ハ絶て其砲類を用ひ得ざる處ハ是  
故ハ攻伐兵ハ務て速ハことを成就せんことを  
務むるを要す又此時の前ハ其騎兵の繼の功あ

る處ハ即傾覆全く甚緩ハ在るを要せし是故ハ  
歩兵ハ攻伐を誘導し且戦闘を進ましむるを要  
せし此時ハ方ハ歩兵ハ陣法をコムハクニ  
ス縦隊ヲ或漸クバタイロンス縦隊ハ取る處  
ハいウんとおきハ大なる縦隊ハ點放を受るこ  
と過多ハしてかやうハ嶮難の地形ハてハこを  
ハ由て騷擾ハ及ふこと容易かきハかば其上小  
かる縦隊を用ふるハ由てハ種々の部位ハて守  
禦兵を脇迫し且攻伐ハ得るの利ありとを  
攻伐の縦隊ハ道路と緩ク傾覆とハ從ハ大ハ數

多の撤兵を先進し且此撤兵は丘陵の縁に佇立  
せることの成就せるとは其撤兵の陣中より  
馳入りて守禦兵を追却せんことを務む  
陣地若しこれを攻技するは一の機會もあらざ  
るはとよこやうに強くあて得るとは追從  
せんが為敵を偽引くを要せし吾々の前の兵  
法接手中第一編に記載せる千七百九十六年  
テンソル地の著明なる戦闘はあつてフランス  
人のオーステンレーキ人を此のことく爲しけ  
るること

千八百零八年より千八百十四年まであつた  
るスハニー國のシキールラント地に於る野戦  
は丘陵の周邊に爲その戦闘は巧妙なりとて此  
野戦ハナシヒエル氏とフランス國のケ子ラー  
ル宦ボーイ氏とよ由て最よく記載しあるか  
千七百九十七年リホリ地にての戦ハカラウセ  
ウツ氏の書中に記せるか  
第二百六章 隘路および嶺間の周邊に爲その  
戦闘を固定の規則或先例を以て論定せんこと  
ハ難しとてここを就ては狹き枯溝より廣き嶺

谷迄ての大かる相違此難事を發せるか  
隘路およひ枯溝若し守禦兵の陣地の正面の前  
に擴充し且こをよ由て其陣地は在るの守禦兵  
を攻伐せんを為しこを踏ゆるを要するの攻  
伐兵は妨害とされると記しハ屢守禦兵の為し甚  
便利とかで得ては殊よりワートルロ地の戰場  
にて契約兵の陣地の前の隘路を以て此のこと  
くあてぬ其隘路を撤兵と狙撃銳兵とを以て甚  
よくこを占領し且守禦し得斯ることハクユ  
ムタユ氏より由て其書千五百一ヶルスユント

スユトセン テス フレユスシツセン へー  
ルス中より記せる千八百十三年ホフキルフ地は  
於る戰鬥は在りける如記か  
此の如記戰鬥より十分の一の先例をも示す  
記かしきりて諸事茲より地形をよく用ふる  
と軍兵の剛勇およひ念力と歸するか  
第二百七章 守禦兵の為し嶮間の具有する品  
位を擴充と絶壁の嶮とをよ由て嶮間は在る  
の妨害と尚殊より嶮間を環逆せんを為し容易  
あるの多少と關係し守禦兵ハ若し時日のあ

ア一とたハ嶮間を通行せるの道路を切所  
由て壅塞せるを要せたりして若ハ嶮間中小川  
の流通せるとたハ堰塞ハ由て湛水を生セ  
むるを要せ嶮間若ハ大なる幅を具有せるとた  
ハ敵の岸ハ在るの或る撒兵ハ其縁の後ハ陣  
地を取て得居ハたりとも嶮間中ハ在るの結  
束せる軍兵ハ道路の壅塞を守禦せ嶮間若ハ纒  
の幅を具有せるとたハ其中ハ一の軍兵も布  
置せることありとも守禦兵の撒兵ハ後  
岸の縁ハ就て布置せ本陣ハ毎ハ嶮間の後ハ在

るかア此時ハ方て砲兵ハ攻伐兵の縁て近よる  
を要せるの道路と出入口とを射防ハ得るやう  
ハ此の如く砲臺の後ハ布置せたりとも歩  
兵ハ横隊ハ擺開ハて敵の眼目ハ對ハて務て蔽  
陰ハあるかア騎兵ハ側方ハ陣地を取て且敵の  
環運せる運動ハ對ハて注目せこそ攻伐兵ハ正  
面攻伐ハ至るよても早くこそハ移轉せ居たり  
のかア  
諸事茲ハハ丘陵の周邊ハ為て戦闘ハ就ての如  
く同く嶮間を通行せるの道路の領握ハ歸て是

故は其道路を以て壅塞し且堅固し守禦  
するを要す攻伐兵此道路を強奪せざる其  
間ハ此攻伐兵其騎兵と砲兵とを將て懈間を過  
り來るあはれ且去るとはハ諸事點放戰  
に限るあはれ是ハ守禦兵ハ其多く蔽蔭せる  
陣地は由て利ありとすたとへ守禦兵の放砲お  
よひ撤兵點放ありといへども攻伐兵若し其歩  
兵を將て懈間を通過せんう為はこれを試戰せ  
るとはハ其攻伐兵の懈間の縁は近よるや  
否は守禦兵の歩兵一對の砲聲を報し且銃槍を

以て此攻伐を懈間中は追隕せし地形若し斯  
ることを妨げざるとはハ守禦兵の騎兵こそ  
は加功し得攻伐兵若し道路を強奪し且其騎兵  
と砲兵とを將て懈間を脱出しけるとはハこ  
そは由て戰鬥生ず是は於ては兩方同一利  
を具有するものあり  
第二百八章 攻伐兵攻伐は移轉し至るの以前  
は懈間を監察せしむ或る撤兵の守護して  
施行するものあり其後攻伐の廟算を規律し且  
佯攻伐も或騎兵と騎砲兵とを以て何處は施

行を履たの且眞の伐攻を何處に成るを履たのを  
核定を眞攻撃の判断に就ては瞬間を踏るの易  
たに注意を而己から以尚又彼方の岸に在る  
地形と守禦兵の走路とに注意をを要を  
砲兵の茲に復ひ戦鬪を誘導し且守禦兵の砲類  
を務て側面におめて射撃し志して目前に在  
る守禦兵の軍兵を害し以て其守禦兵の砲類を  
黙止せしむるに至らしめんことを務むるに守禦兵  
若し多の軍兵を瞬間中に具有せるとは其  
瞬間に擲發せるの或る榴弾の良功を成し得る

山攻伐の爲に一定せるの歩兵を三隊に位列を  
し第一の隊に擺開し第二の隊に縦隊に位列  
し第一の強勢なる撤兵陣第一の隊に先立ち瞬間  
に下り且若し僅の幅を容れざるにたしは  
務て疾く彼方の縁に達せんことを務むるに其  
間第一の隊に瞬間の縁に發向し至りあて  
志して其瞬間若し餘り廣からざるとは其  
其所より對向しあるの敵に點放し撤兵瞬間を  
押領しけるや否し此隊其瞬間に下り下底に到  
りて稍班次を改復し且其後守禦兵の方には在る

傾覆を乗るかてこそ固く其所に據らむる為か  
 第二の隊ハ其あいと嶮間の縁に併立を  
 今嶮間に出来る道路の一を押領せんことを務  
 むこそ務て速に騎兵と砲兵とを動作に致さん  
 り為かて若くこそを成就しけるとたハ第二  
 の隊も亦嶮間を通過をこそ第一の隊と合併し  
 て彼方の岸に在る戦闘を進ましめんる為かて  
 守禦兵若く其全戦力を他所に合併せんる為に  
 其陣地の或る部位を弱め得けるとたハ騎兵  
 と騎砲兵とハ此部位にて嶮間を踏へ且敵を側

面を取らんる為に其使用法を為を要を  
 最著明なる嶮間戦々ラムヘルホフ氏の記載セ  
 る千七百五十九年ク子ルストルフ地の戦に見  
 也  
 第二百九章 堡障を以前の軍にわめてさやう  
 に夥くこそを用ひ且屢こそを用ひ誤しけるも  
 のより初代フランス國帝畿中の軍に殆ど全  
 く不用に至りぬこそ其時の軍旅の迅速なる舉  
 動と尚又築造の製作兵と守禦兵との拙陋こそ  
 う媒を為しけるかて若くとも軍史に由るハ



堡障の重惜の使用ハ若シ判断を以て應用さへ  
そまへ常ニ守禦兵ニ大利を致しけるとあり  
第一世ナポレオンも其手冊ニ此利用を指し  
けりまうして後世の軍ニかゝてハ復又大ニ築  
造を用ふるニ至りけるかといふんとあまハ其  
用ひを兵法と連結しかゝて應用し習ひける也  
へニ殊ニ又志ありとせ  
學術日々ニ尚ほ充全たる火兵のいかにも恐怖  
を盈くあまハ愈多くこまニ對して警備せんこ  
とを務むるを要せまうしてこまニ未來の軍ニ

建築術を漸々多く用ふる原因なるを  
オヒシール官建築と堡障の攻伐および守禦と  
を以て悉皆ニ領會しあらむことと歩兵土工役  
ニよく上達しあらむこととの已を得ること  
をこまニ由て十分ニ明白かすと  
第二百十章 堡障の守禦兵も或其自己の力ニ  
委任せらるるあり得或強勢の游兵ニ由て應援せ  
らるる得  
小分隊若シ多分諸山ニ於る軍ニ在るゝ如く連  
綿として或る地形を警固せんう為ニ定である

と如る或山道や堤防の或他隘地やのこと如特別なる部位を警固し且守禦せざるを要せると如るよと建築法を用ふるを要せし堡障の守禦兵多分其自己の運よ委任せらるるの此の如し堡障を建築術の規則よ從て建築を志しして斯ることへ殊よ守禦兵の在る所の地形と形勢と且守禦兵の同勢との一致よあつて其堡障ハ多分閉鎖しあつて一の退陣處を具へあるを要せし時としてまたとへ動作の關係斯ること需むといへとも覆屋せる區域を具へあるを

要せ給養と彈藥とよ注意し病人と手負との所置よ配慮せざるを要せ且襲撃よ對してと孤立し在る家作の守禦よ就てのこととく同一規矩を取て其規矩よ從ひことを改るよ方て嚴重且剛強よ行ふかといふんとあはれことを今一回反覆せしむる者ハ耻辱を受くといふんとあはれ此指令官已きよ定むる信義を傷ひはかす堡障の入口よ一の野番所を置く其番所畫ハ堡障外よ哨兵を張出せ且夜ハ歩哨兵を以て堡障を環かす

此番所殊に夥た有候を遣る且發行兵の指令官  
ハ連々たる止静に由て不虞に陥らざるに嚴か  
る處たとせ

野番所若し此もやうにて攻伐せらるくとた  
ハ守禦兵敵の近よりにて外哨兵を退るゝむ  
且各徑に其陣處に赴く此陣處ハ既以前以て各  
丁に指示しあるを要するか正退陣處ハ別格の  
警固兵を具ふ歩兵の一部分ハ武者走の脚に布  
置し且自餘の部分ハ游兵に在るか  
砲兵ハ其點放に由て敵の砲隊の堡障に近く陣

地に來るを妨ぐるを要す其後攻伐の縦隊を射  
撃し且終に堡障の歩兵を應援するを要す此時  
一方て其砲兵攻伐兵の砲類の其及達に來りあ  
るや否に其點放を發せしむるとも此砲類若し  
茲に攻伐兵の砲類破損を處たの危険生するは  
とに烈に功利を得んことを始むるとたに多  
分砲兵其砲器を武者走の脚に退却するを要す  
處に若し是とも攻伐兵其砲類を將て前進し且  
こ是に由て其砲兵拒防かかすゝや否に守禦  
兵の砲兵復ひ動作に至るか否に是とも其最

身内論 二編卷之三 三十四

多の功利を攻伐兵の攻拔縦隊の前方に馳向せ  
ると死し得る一とをこそよ由て攻伐兵は其砲  
類を以て點放せるを屢妨けらるゝかば敵の縦  
隊若し壕の縁に迫りて近よるゝあると死しは守禦  
兵其砲を退却し且退陣處に近く布置せよは榴  
彈を以て攻拔せる敵を覆はんゝ為かば砲類若  
し隄後より運輸せらるゝと死しは即少も  
裝填具と彈藥とを携輪せるを要せよからさよ  
は攻伐兵退陣處を射撃せんゝ為よこそを用ひ  
得るゝ

戰鬥の最初よは歩兵或る狙撃銃兵よても其他  
よは何兵をも胸壁の後よ布置せよは其狙撃  
銃兵と砲兵のことく同く諸般の部位よは堡障  
までの距離を以て示さよあるを要せよは此距  
離よ從て其照尺を規律せんゝ為かば此狙撃銃  
兵最初よは砲兵よ點放せよ警固兵の自餘の歩兵  
と敵の放砲よ對して務て多く蔽陰せよ敵の撒兵  
の近よるや否よ或る歩兵を胸壁の後よ布置せ  
狙撃銃兵よ今攻拔の用具を具せるの才はシリ  
ンと士卒とよ照準を且攻伐兵の馳來る度よ

從て多の歩兵を胸壁の後に布置するに終に全  
一班列ハ茲に點放しあて且第二班列ハ銃を裝  
填するに至るに攻伐兵の壕塹中に下であるや否  
に時として尚手榴彈をよひ短管を以てするの  
榴彈を其中に擲發し得るに歩兵も今胸壁の後  
よて游兵の側を赴くときは攻伐兵若し胸壁の上  
を見ゆるくや否よときは一齋發を為し且其後  
直に銃槍を以て攻伐せんう為か守禦兵の此  
攻伐若し失策するときは守禦を退陣處に轉  
し得るに

第二百十一章 堡障と一軍旅の戰陣を強め且是  
故に強勢の游兵に由て應援せらるるものよ  
て其定法は満足せんよハ前は在る地を諸方向  
にあつて射防し得るにやうに戰場の制する部  
位にこれを建築するを要す此堡障も互に應援  
するを要すよと兼て游兵其兵の自由か  
る使用を為し得ると此游兵守護を復ひ堡障中  
に聚集し得るとよして終に堡障の一の敗亡  
を自餘の堡障の敗亡の素因とからさるとよ適  
するを要す通常此の如き堡障孤立しけるとは

よと纒の守禦力を具有せるかといふんとか  
は多分急速よかぬて築造し且屢其前よ在る壕  
塹の土の築堆よても他のものよて成らざるは  
かよ此堡障も一回から屢吭啞中よ閉鎖し或  
閉鎖する為よ輕易の木柵を具有せ且時として  
砲兵も堡障中よ在らばといへとも志つても  
堡障の側方よて別格ある胸壁の後よ在るかよ  
此の如き砲兵堡障の守禦法も以前のものよて  
も全く他の性質のものかよとて堡障自己も砲  
兵蔽蔭して布置しあると且攻伐兵其攻拔よ就

て壕塹よ下でて胸壁を乗るの間よ騒亂よ致さ  
る守禦兵の游軍よ撃たを得るとよあらざるは  
絶て他の利をいあることかよ守禦兵の力も此  
游兵よ止まらず且堡障の唯旋點而已よて其用  
田よ戦闘あるものかよこよ屢槍攘槍棄して終  
よは最後よ生兵の游軍を用ひ得る其人の領握  
よ留る處よ  
守禦兵の砲兵へ攻拔兵とかでて毎々堡障の近  
くよ來てあて堡障よて砲類を退却し且こよを  
堡障の後二百歩乃至三百歩かよて砲列よ

布列せるを要せし敵の堡障より脱出せるを妨げむう為かば茲は砲兵若し攻伐せらるる堡障の側方より布列しあるとせば其點放を攻伐縦隊より對向せし且此攻伐縦隊若し吾う歩兵と戰鬥し及ひあるとせば攻伐兵の游軍より對向せし

自餘の堡障の警固兵は歩兵より成り其内より或るよは狙撃銃兵あるを要せし此歩兵は餘り數多くあるを要せしといふんとするは志のらさし敵の擲發砲より由て多の敗亡を受く處なり

へかば守禦は自餘の堡障より就て以前より云ひし如く同一方法より成るべき  
第二百十二章 堡障は為その攻伐を復し最難なり企し屬せしとへ襲ひし由ても或困る由ても若し他の一法より其目的を達し得るとせば此攻伐より移轉せるを要せし攻伐の方法は自然亦唯堡障の警固兵と而已戦ふ處くあるは或此堡障強勢ある游兵より由て應援せらるるの疑問より關係せし  
堡障若し其自己の運より委任せらるるとせば

ハ極最初はこを監察しきりて警固兵の守  
禦術を探聴せんことを務むるを要す

砲兵ハ攻伐を誘導を盡し此時は方て其砲兵守  
禦兵ハ勝て砲類の過力を具有するを要すい  
んとなきハ其課業守禦兵の砲類を黙止する  
至らしめんことと木柵および鹿角木を破却せ  
んことと去りて榴弾を以て警固兵を擲撃せ  
んことと在るハかす

守禦兵の砲類を黙止するは至らしめんを為し  
ハ攻伐兵其砲類を一部分ハ堡障の前面の延線

中ハ布置し且一部分ハ大なる間隙を以て堡障  
の砲窓の延線中ハ布置をこ敵の砲類を露出  
し且破却せんを為し砲兵堡障を距て布置す  
るの距離ハ地形ハ在る蔽蔭物ハ關係を盡し然  
ととも八百歩より多し至り得ざるを盡し去り  
して若し夜間埋伏ハ由て砲類を蔽蔭せる布列  
ハ致し得けると記し去りて甚便利なるを盡し  
砲兵其宿意を果しけるや否し十二ポンド地砲  
および中砲を堡障より五百歩乃至六百歩  
この進て進出を去り去りとも毎ハ尚前面を射撃



一あるかば此砲兵胸壁を擲撃し殊に突出と  
灣屈との所よこを擲撃し且堡障中よ榴弾を  
擲發するを要し守禦兵若し隄上よ在るとたよ  
ハ一對の砲よ由て霰彈を以てこを射撃す  
今若し砲兵其課業を満足し且大半ハ堡障其守  
禦術を歇くしあるとたよ茲よ其他の攻伐よ  
移轉すこより為よ歩兵を三分よ分つかば其一  
部分よ堡障の本來の攻拔を以て奉命せば他の  
部分ハ游兵よ在り且第三部分ハ警固兵よ就て  
外よその諸應援を隔絶せんよ為め既よ以前よ

遣らよあるかば  
攻拔を為す砲の其部分ハ茲よ攻伐の部位を  
撰定するよけの縦隊よ處分す其部位ハ通常突  
出せる隅角と堡障の射防するよ惡劣部分と志  
こして弱劣部分とよ在り且時として又堡障  
の吭嗟よ在るとも各縦隊よ斧と鉏と鋏と抄  
循と火藥囊と且其他要用かる所の斯のことた  
ものを具するの兵士を部署すこよ木柵を伐る  
よ或火藥囊を以て破裂せしめんよ為と壕の縁  
およひ胸壁を堀崩し且壕水中よ一の土堤を築

造せんか為めかて攻伐は定る歩兵の陣法を横隊に在り得るべきとも多分は縦隊にあるを志し其のしをあら其縦隊を過大からざるを要す志し一にて一の強勢なる撒兵陣を先進するを要す此撒兵は用具を具するの兵士あるかて撒兵を前進して壕の縁に至り其處にて務てよく蔽し且胸壁の後にあるの守禦兵は點放し用具を以てするの兵士は此擧に乘りて諸障礙を除却するを以て油断なくあるかて此障礙其除却を以て準備せらるべきあるや否は攻

拔縦隊進出し堡障より其距る所の距離をハ大かる速度を以て通過し壕壘中より下り且守禦兵の游軍を攻伐せんが為は諸般の部位にて堡障を押し入るべき此戦闘の在る間には用具を以て具備するの兵士は破隙を太めし且若し攻拔する攻伐の敗績せるとは第二の攻拔を容易く為さんが為は多く破隙を乗るを為すを要す若し攻伐の成就し且守禦兵の游軍の撃つるごとくは攻伐兵此游軍と同時に退陣所を押し入らむことを務

孫子兵法論 二編卷之三 十一

むるを要せ若しこを失策せるとは砲兵を保障中し致せを以て強て退陣所を棄走せると迫る處山攻伐若し全く失策せるとは退却せる軍兵の游兵に由て包截せらるるは堡障を改復せんを為し守禦兵の一の時日もあらしめさらんを為し直し攻伐を反覆せし第二百十三章 堡障一軍旅の戦陣中に在るとは多分暫時に建築せらるるは且こを以て僅の配慮を以て建築せらるるはかやうの堡障に在ては堡障自己に為すの攻伐は總も困難

にあらざる處にありとも其上に攻伐兵は堡障の軍旅中他の堡障に由て射防せらるる處にありして守禦兵の游軍中強威の敵と戦ふ處にある處にあり配慮にありを要す是故に攻伐を強に放砲に由て誘導せざるを要すこを以て就ては唯堡障の警固兵を射撃せる而已からは尚又若し游軍の見ゆる處にあるとせばはこを以て點放し或よく游軍の若し見ゆる處にあらざるとは疑ふらくも此游軍の布置にある所は方向に榴彈を擲發せるを要す

攻伐縦隊ハ守禦兵の游軍を驅らんヲ為メ定メ  
あるの強勢かる分隊ニ由て應援せらる此時ニ  
方てハ攻伐兵の砲類此游軍を務て永く射撃シ  
て以てこそニ加功シあるを要す攻伐兵と守禦  
兵との游軍ハ屢戦闘ニ及ぶ處ニ在ると此堡  
障の運ハ此規則ある戦闘ニ關係す攻伐兵若シ  
守禦兵の游軍ニ由て討却せらるると此堡  
障の押領最早考ふ處ニ在らば志々としてこ  
そニ反對シけると此堡障の押領容易ニ連  
續を爲シ

千八百十二年モスクワ地の野戦および千八百  
十三年トレスデン地の野戦ハ著明の堡障戦か  
らとて就中イタリイ地ニ於る千七百九十六年  
の軍役中とスパンニイ地ニ於る千八百零九年と  
千八百十四年との軍役中とハよて守禦と攻伐  
との別々の堡障の例多しとて

慕氏兵論第二編應用兵法卷三 畢

慕氏兵論第二編應用兵法卷四  
 第二十四章 隘地戰の總學科  
 隘地即隘地といふ語の意味  
 由て一の大軍勢の張列せるをも容さくる地形  
 の部分をいふか是故に隘地といふ語の意味  
 を定まてあること甚纒としてありて軍兵の  
 員數に關係し且又此地形に張列せるを要する  
 の兵類に關係を  
 隘地は二種ありて一單純の隘地と聚成の隘地即

大なる隘地こそかば單純の隘地も多分側面より近づく處あらばあてて甚廣のらさる地形の分界を踰ゆるの轉移を形出そこを屬せるものと山道と渉場と橋梁と志りて堤坊とかば聚成の隘地ハ多分小勢なる軍兵の分隊殊に撒布せる班次よかゝて側面より近づく處あるものよして障碍而已よ由て生じ屢大なる長さよ挺出し且寛く且廣き地形よ由て此所彼所より更錯せるの連合よ成るかや是故よこそよ屬せるものハ澗道と水地よ於る堤坊と志りて稠密

かる村市郷村都會より通するの要道こそかば此種々かる隘地の所在の周邊よて為その戰鬥ハ多の注視よかゝて互より同一よして且唯隘地の形状と形勢とのこそよ誘導を為そたけよかゝて而已雙方異をばてこそよ由て此戰鬥ハ或る法則互より通用を其法則ハ無用の反覆を避けむら為め茲より簡易よこそを前文より置く處より第百十五章 隘地の監察よ就てハ特よ敵の方の入口と他の方の出口と隘地の長さよ其所より出来る所の道路と志りて隘地を回行せるもの

近くは在る道路とて意を注くを要す  
隘地へこそを用ふるを憚れんう為や或敵のこ  
そを用ふるを妨げんう為やこそを守備す兩  
時扱も異なる規矩を要す其規矩ハ隘地の區域  
との關係はあつて守禦兵隘地の後う前うは陣  
地を取る處を論定せるか  
第二百十六章 敵の隘地より脱するを妨げむ  
と思ふと然るは後面は就てこそを守禦す此  
陣地ハ守禦兵は最よは陣地かると  
あると然る守禦兵ハ隘地の後五百歩う乃至六

百歩うは其軍兵を布置す此所は布置せるの砲  
兵より別として十二ポンド砲一砲隊ハ砲臺中  
は至る此砲臺ハ長はあつて隘地を射防するも  
のかは翼は在るの砲隊ハ雙方容易は運動し得  
るやう此のことの距離を具有せるを要す  
歩兵ハ二隊は布置す第一陣ハ砲兵の間隙の  
後ハ排開して布置し第二陣ハ正中は縦隊は布  
置し翼ハ隘地は據拠あるを要す騎兵ハ騎砲  
兵と俱は翼は在るこそ隘地より脱出せる敵を  
側面はあつて攻伐せんを為す隘地の出口は

在る人家と小森と志うて他の地形物とハ歩  
兵を以て守備し志うて殊ハ狙撃銃兵を以  
て守備し歩兵および或る騎兵より成るの一小  
前拒ハ隘地の前と入口とに在りて是敵の運動  
を實驗し且其同勢を探聴せん其為か  
攻伐兵の常ニ隘地を環運せんことを務め或側  
面攻伐ニ由て是を押し領せんことを務む是  
の由へは守禦兵ハ近くは在る隘地を壅塞し且  
砲類一對の砲と或る歩兵とを以て是を守備  
するを要す其上騎兵の一部分も騎砲兵と俱

準備し有こも環運する運動に逆ハん々為か  
第二百十七章 若し攻伐法ニ所置せんと思ひ  
且此時は方て隘地の主たるんことを思ふと  
或若し隘地を過て退却するの敗績せる兵隊  
を包藏するを要すると此のよは隘地の前ニ陣  
地を取るべきこと毎ニ甚危険の陣地か  
其危険の増息せんこと退却する軍兵の包藏  
由て尚甚しと  
軍兵を布置するよは茲ニ前以て取極たる運動  
の大なる配慮および細密なる施行を要す



一 要用かるものハ地形のよき用ひと軍兵の千變万化迅速かるとかば陣地を守備せる方て々次の重事ニ注慮ある處一其ハ單一の部位を押領せるを以て々攻伐兵直ニ隘地ニ衝入し得あさハさること其二々攻伐兵の放砲ニ由てハ隘地を射防し得あさハさること三々かて其三々退却せる方て守禦兵尤やうニ隘地を蔽護しあらむる為ニ或る時間敵を拒捍し得るの良法後拒陣地を擇出せるを要しけること  
是かて

軍兵々通常茲ニ又二隊以上ニ布置し隘地の前ニ一弧圓を形出せるやうニ此の如き方法ニかゝて翼を隘地ニ據托して以て布置し一の強勢ある撤兵陣ハ諸の地形物を守備し助兵と游兵とニ應援せらる騎兵の或るペロトンスハ敵を實檢し砲兵ハ十二ポンド砲一二砲隊を以て隘地の入口を蔽護し歩兵の第一陣ニ在てハ或る砲隊道路と前面ニ在る地形とを射防し騎兵ハ騎砲兵と俱ニ敵の張列せる方てこれを攻伐せんる為ニ備ふ隘地の後ニ諸兵より聚成

いたる游兵あるか

陣地の深さをとてきう為に定まる軍兵の員數に平均しあるを要す。陣地若し餘り擴充しあると犯し其陣地容易に隔絶せらる得是を殊に守禦兵の爲め茲に最危険なるの至極とをいかにとあまはるかると犯し守禦兵其走路を絶らるる危しきかてと犯し反して若し隘地に接して備ふると犯し退陣し方て隘地に追込めらるる爲の危険に臨む是よりして大なる騷擾の生し得る所を又守禦兵に其配慮を道路

に注視を要す此道路に縁て敵守禦兵の退陣を脇迫し得るに於て

守禦兵若し隘地の後に退却を要せると犯しは後拒は是より爲め以前に擇る其陣地を布置し去りて自餘の軍兵の退陣を完成しける迄て其間此陣地を守禦し退陣を最多く敵の攻伐に露面しあるの此部分を以て始む通常に騎兵先つ隘地を通過し其後砲兵且終に歩兵を通過す諸軍兵に雖今隘地の後の守禦に就ていへることく隘地の後に布置せるか後拒

兵ハ最難ヲ課業を遂くることあり是故ニよテ  
軍兵ヨリ成ヲ志シテ若シ大ナル隘地を過テ  
退陣モると死ニハ後拒ハ他ノ軍兵ニ由テ隘地  
中ニ包截セらるゝか也

此退陣ニ就テハ諸事正ニ時刻ニ戦鬪を止むる  
ニ關係モ盡シ若シ本軍ノ退陣一息間餘リ遅ク  
始ルウ或後拒ノ退陣餘リ速ク始ルウのと死ニ  
ハ是ニ由テ隘地中ノ軍兵ニ騷擾生シ此騷擾ハ  
守禦兵ニ最不運ナル所以ノ者を貽シ得るもの  
か也

第二百十八章 隘地若シ甚長クシテ吾味方ノ  
軍兵を張列シ得んウ為ニ適當セる廣地隘地中  
ノ此所彼所ニある處ノといヘとも攻伐兵ノ軍  
兵此利を欽クと死ニハ稀キニ陣地を隘地中ニ  
取るか也

此時期ニ於テハ小勢ノ前拒隘地ノ出口を實檢  
シあるか也隘地中軍兵ノ布置ハ地形ニ從テ規  
律モ最密ニ部位ヲ壅塞シ且其壅塞ヲ放砲ト撒  
兵トを以テ守禦シ騎兵ト游軍歩兵トハ隘地ノ  
後ニ備フ環翼ヤ或側面攻伐ヤニ對シテ規矩を

取るべき

第二百十九章 隘地の後よてよく守備せる陣地よ為を直ちの攻伐ハ甚し死試戦の企てかてとそ是故よ攻伐兵ハ襲撃よ由て隘地を押領せんことを務め或環翼かよひ側面攻伐よ由て守禦兵をして退陣よ已を得さらしめんことを務むるを要せ若し唯こを施行を急らさざると死と攻伐兵隘地の主たらんことを欲せると死と而已よ其隘地を攻伐せるを要せ攻伐の算も隘地の形質の理會よ本つ死且守禦

兵の同勢と規律とよ本つくかて騎兵と歩兵とハ隘地中敵の前哨を驅除し且此前哨攻伐兵の同勢を實驗せるを妨げこを兼て隘地と敵とを監察せ一の強死撤兵陣を先進せる或るバタイロンス縦隊も隘地を通過し且固く出口よ據らんことを務むこを其處よて其點放を砲兵よ向けんよ為かて十二ホンド地砲一砲隊も隘地を過て行進し歩兵よ由て後繼せらる撤兵の守護よ隘地の側邊よ砲列よ布列し守禦兵の

正中の砲は點放を此砲列へ甚しく敗績を盡し  
あつても點放を已まし受くるを以て自餘の  
軍兵の隘地より脱出せるを容易く爲すかば砲  
兵ハ縦隊に於る歩兵の或るバタイロンスは由  
て後繼せらる其バタイロンスは後繼のバタイ  
ロンスは位置を爲さんる爲め逐次は隘地の外  
直は右方と左方とは蔓延を志しとて騎兵の  
攻伐を拒捍せんる爲め縦隊に在るかば此バタイ  
ロンス若し追却せらるくとたはハ隘地中より  
退却を志しとて後繼の軍兵其地より脱出る

を妨げさらんる爲め其隘地の右方より或左方より  
に在るかば此歩兵の後には騎砲兵後繼を此騎  
砲兵ハ速に十二ホン下地砲砲隊の側邊に布列  
し且敵の砲兵は點放を其騎砲兵へ復ひ歩兵縦  
隊より由て後繼せらる志しとて終は若し守禦兵  
の砲兵遠離せるとたはハ騎砲兵は交代せるの  
野戦砲隊より由て後繼せらるるの騎兵隘地を過  
て馳向ふこと此騎砲兵ハ騎兵と俱に守禦兵の  
側面を攻伐し得んる爲かば遊軍の歩兵も騎兵  
を後繼を

軍兵を隘地より出口の度より従て前の方より地形を得んことを務め且敵の守備せる地形物を押領せんことを務むるを要す

攻伐兵の所置法の此簡便なる校計より斯る攻伐のいふより難くあるを列分より顯へし且最多の沈着および班次のこきより要用なることを十分より顯せしむ

第二百二十章 守禦兵若し隘地の前より陣地を取てしとたより茲より正に通常の戦闘あることを就ては攻伐兵は守禦兵を隘地より追却してこ

きを其内より追従し且務てこきと俱より茲より押入らんことを務むるを要す此目的は若し守禦兵の陣を隔絶し以て其走路を絶るとたときよりて放砲を以て隘地を射防し得るとたときより最容易よこきを達せしむ

前拒を以て戦闘を誘導するより地形と敵の陣地とを監察し且其後攻伐の部位を定むるかば守禦兵の班列中より或る騷擾生し且其守禦兵より退陣の備を為すを見るや否より走路の方向よりおのて強た攻伐を企てんより為の時刻ありとを此

攻伐の成功ハ此後其他の所置ニ就テ決るカ也  
第二百二十一章 守禦兵若シ隘地中ニ陣を取  
リシト犯ト志シテ茲ニ其陣を環翼せんカ為  
ニ容易カることの發せると犯トシテ攻伐兵其  
軍兵の一部分を隘地の前ニテ敵の點放の及達  
の外ニ布列シ且環翼ニ定まるの軍兵を密々ニ  
差撥モ盈シ環翼縱隊の守禦兵と戦ニ及ヒける  
を放砲およヒ放銃ニ由テ聞知るヤ否ニ正面ニ  
おゐても亦隘地を攻伐モ志シとも環翼縱隊  
ニ環翼を遂げんカ為の時を授與せんカ為ニ餘

ニ烈クモ攻伐せざるカ也此ニ隘地の出口ニ近  
よるヤ否ニ反對モ攻伐ハ守禦兵と同時ニ隘地  
よテ出んカ為ニ今務テ最酷烈ニ進至るを要ス  
ことニ就テ種々の兵イラニ用ヒらるるを要ス  
るヨ且何の兵先ツ隘地よテ脱出モ盈カクノコ  
トモ隘地後の地位の形質ニ關係モ  
第二百二十二章 此考正ハ前の法則たとヒ大  
勢カる團軍の為ニ算定セテといヘども小勢カ  
る軍兵の部分の為ニモ亦纔カラ引證を含有  
スルことを茲ニ附録シテ以テ此を卒業モ盈

一ここを就ても唯在陣せるの形勢を正しく鑑定  
 せると制御し得るの戦力を正しく鑑定せるとは  
 注意せざるを要する而已かざると  
 第二百二十三章 山道は兩側高山に囲またる  
 険路かば此の如く険路若し回行しあたらずに  
 て其上其側傍の絶壁充分に通行せざるを  
 しとせよ其陣地建築を為すを要せざると  
 若し是とも其絶壁此形勢に在ること稀か  
 ざりてたとへ斯ることの時多の困難と混  
 同せるといへとも多分は山道を回行せんを

一容易なることありとせいかんとかきハ敏捷  
 かる歩兵側傍の絶壁を乘り得るハか  
 第二百二十四章 山道の守禦兵若しここを為  
 するの時日と方術とを具有せるとせよ其堡障と  
 關城と木柵とを以て切所とよ由て其険路を  
 強め且ここを壅塞せざるを要し就中攻伐兵  
 たとへ又壅塞を除却し得けりといへとも屢新  
 かる妨害を支ゆるやうに此のことく壅塞せ  
 ざるを要し一側傍絶壁若し或る地位にて乘ら  
 ざるありとせよハ同く其地位に築造を設くる



を要す守禦兵と攻伐兵壅塞を除却しあさるるやうにこれを其強を放銃の及達中に置くに注意するを要す山道の守禦に用ふるの兵は歩兵と砲兵とに在りて歩兵も亦最多く擢出せるの兵ありとせば此は狙撃銃兵を肝要とす

砲兵は山用砲より成るを要す輕中砲のこまを為すフランス人の具有せることく甚こまの中せるとは若し重野砲兵を具有せるとは此を陝路の出口の後より布置せるを

最佳とす處しこれを攻伐兵の若し隘地より脱出せるとは霰彈を以てこれを射撃せん少為か

歩兵より聚成し且時より一部分に騎兵より聚成しとる強勢の游軍に攻伐兵を隘地中に追却せんと為す準備しあるを要す

第二百二十五章 克く建築せる山道を攻伐するに難を企みて且十分に危を企みとせば此山道は回行し得ること容易からし且陝路を押領せんよこせば砲兵を用ひ得ることかく屹と

十分よこを押し領せるを要せるとたよハ夜間  
ろ或霧深地天氣うよ數多の撒兵をして其笈を  
脱して兩側の障壁を乗らよむ處よこを此の如  
くよ守禦兵を襲ふて攻伐せんよ為めおよひ纒  
の敗亡をも受けさらんよ為かよ此企よ屬せる  
ものよ多の強暴と剛勇およいよんとおよハ此  
撒兵強敵と戦ふを要せ處地而已からよ尚其上  
暝黒よ迷ひ不知不案の道路を縁て容易く山下  
よ押下よ得よハかり此撒兵蔽陰よて守禦兵よ  
近よるを要せおよよ七夜明け或霧晴よけるや

否よ壅塞およひ堡障の後よ布置せるの守禦兵  
よ點放よ其間小縦隊の歩兵よ丘陵の撒兵の點  
放を聞くや否よ正面よおよて最大の速度を以  
て堡障およひ壅塞を攻伐せんよ為よ準備よあ  
る此時よ方てハ同く其笈を脱してあるかよ其  
成就せるとたよハ此歩兵守禦兵と同時よ次の  
堡障或壅塞よ到着せんことを務め且此の如く  
よて山道を押領せんことを務むるを要せ  
およよとも今尚最難地課業を遂くることあ  
る陵地よ脱出せる是かよ山道よ在る壅塞を

道路より除却しけるや否や遊兵茲に進發を撤兵と狙撃銃兵とハ出口に布置して守禦兵の砲兵をして退陣し己を得さらしむるを務む若しこそよ一の時節もあらざるとはハ撤兵の一郡隘地より出て左右に蔓延を爲すの攻拔縦隊より由て後繼せらきて砲兵に溢下るを要せし攻伐兵若し山用中砲を具しけるとは榴彈を以て堡障中と壅塞後とし守禦兵を擲撃し得且壅塞を除却し得るはこそよ由て攻拔却て容易く成るるなり

山道に據るの緊要なる戦闘は千八百零八年スハニ一國をおめてリモシールラの山道の戦闘かや此陵路も規則外にして騎士に押領せらるるものかや其他將軍スケット氏其筆記中に記載せる千八百十一年スハニ一國をおめてリホリ地の戦いオステリア地に於る戦いモントセルラト地の攻拔是かや  
第二百二十六章 橋梁戦を總して隘地戦と同  
一かること多くとを若し橋梁を斷さざるとは  
よハ殊よ志ありとを志うとも守禦兵若し橋

梁を破却しけるとは此戦闘全く他の性質を具有せしむんとせば攻伐兵の其攻伐を他の沿河に致さんう為め守禦兵の點放の下に橋梁を架し或修理せしむるかてこそ屢成る處のらさることと屬せしむるものかて是故に志あるとては又茲に橋梁を絶せんとせしむ

第二百二十七章 若し橋梁を壅塞し且これを河川の灣曲に置て其灣曲の側面橋梁の後を布置せる守禦兵の方より反して此守禦兵攻伐兵を中心し射撃し得るやうにあるとて其他若し

前面に在る地形開濶に在り且後面に在る地形に物体ありて能守禦せらるを得るとは橋梁の守禦兵に甚便利かるとも終に守禦兵の沿河他の沿河を制すること大に緊要のことかとて此反對攻伐兵に便宜あることと自然ある處に橋梁戦も橋梁の前面或後面に在り得る第二百二十八章 守禦兵若し橋梁の前を陣地を取るを要せるとは總して隘地前の陣地に於るよても尚便宜の形勢に陥るいふんとかまへ攻伐兵時に其砲類よて或る射放を

以て橋梁を破却し得るは守禦兵に正し此の如く摸やうにあつて隘地を守禦するを要しけるは如くは所置を急し此守禦兵に唯尚多の配慮を以て橋梁を敵の點放し道つと攻伐兵其砲兵を以て橋梁を射撃し得るの部位を其砲類の射防する點放中し保守し且其他騎兵と砲兵との退陣若し餘り遅く成るとは甚危険し成り得るは毎し大なる敗亡を誘導することし注意しあるし由てするを要する而已橋梁の後し布置せる游兵に軍兵の退陣中若し

攻伐兵衝突して橋梁し至り且こゝより由て或る軍兵の隔斷せらるを見るは其軍兵を遁さんし為め此游兵橋梁を踰て發向し橋梁を踰て為る隊伍の退陣し隘地を過て為る退陣の如く同く後拒の守護して成り且此後拒し退陣を為る以前し其歩兵の一部分を以て橋梁の前面し在る人家かよひ小森を守備せしむ此歩兵し橋梁を絶つ規矩を取しけるは其所し備へあるを要し其後橋梁を踰へ去るは此こゝを破却し

第二百二十九章 守禦兵若し橋梁の後は陣地  
を取てけるとたは此守禦兵橋梁を壅塞する  
を要むことを壅塞するは糞を以て載積し車  
輪を脱せるの或る輪車を用ひ得石橋は在ても  
欄檻を毀つことは火兵は妨げあらんが為か  
今若し僅かる員數の軍兵を以て守禦を為すを  
要むるとたは砲兵對岸に在る橋梁の方の道  
路と出入口とを射防し得るやうに蔽陰せる砲  
臺中に布置し狙撃銃兵は沿河を縁て橋梁の兩  
側は布置し尚砲兵の點放し妨げあらんこと

注意す此狙撃銃兵は敵の點放し對して埋伏  
す歩兵の一部分は橋梁の近傍に在る人家と小  
森とを守備し且此處を守禦状に設置す歩兵の  
游軍は攻伐兵若し橋梁を踰て突進し得るとた  
は此處を追却せんが為し準備せるの騎兵と  
俱し務て陰蔽しあるかや騎兵は橋梁の上下河  
川を實檢し  
此處を以て若し大なる兵隊を以て橋梁を守  
禦するを要するとたは軍兵の布陣と其自餘  
の所置とは通常の隘地後の守禦に於るが如く

謀略兵論  
二編卷之四

同一のるる

第二百三十章 橋上の攻伐ハ守禦兵若くは橋前  
に陣地を取てしとたよハ此形勢の爲め隘地戦  
に就て説けるの法則に從てこそを爲そ  
攻伐兵ハ放砲を以て橋梁を破却せん事を務め  
即少も是を射防せん事を務むるを以て此  
攻伐兵ハ守禦兵其軍兵の一部分を橋梁を踏  
退るしむるを見るや否よ攻伐を勵まし且守禦  
兵と同時に橋梁を踏へん事を務むるを要す  
第二百三十一章 守禦兵若くは橋後に布置しけ

るとたよハ攻伐兵の課業却て難しとて志ある  
とたよハ強死放砲を以て攻伐を誘導せるか  
砲兵ハ其射放を守禦兵の砲類と橋梁の壅塞と  
守備せる人家と且橋後に在る軍兵と眇看を  
狙撃銃兵と撒兵とハ橋前の近傍に在る地形物  
を守備し且其射放を殊に守禦兵の狙撃銃兵と  
此砲兵と眇看せるかといふんとかよハ攻伐  
縦隊の動作に至る以前に此砲兵の點放の功力  
を挫くを要すよハか  
騎兵の一部分ハ河川中涉場を見出さんことを

謀略兵論  
二編卷之四  
十九

勢む且自餘の部分ハ若し橋梁を押領しけると  
たし敵を従はんの爲に準備しあるか  
放砲し由て守禦兵の動搖するに至るや否し攻  
拔し移轉を此攻拔ハ亦隘地にての攻拔し就て  
説ける如く同法にて施行せるか  
橋梁戦に在てハ軍史に富めるとも其橋梁戦ハ  
守禦し由ても攻伐の方法し由ても証例とか  
得るゲ子ラール官ヨミニ氏とカラユセウイツ  
氏との著書千七百九十六年ロチ地に於る橋梁  
戦ハ尚全く異るといへとも殊に著明かすと

其他千八百零九年に於るタメカ橋の押領を學  
ぶを要すこと書名ナールヒールに就て見る處し  
又千八百十四年モンテレアユの橋邊と千八百  
十五年ワフレの橋邊に在る戦闘を學ぶを要す  
こと其軍役中の記録しつまひらうか  
第二百三十二章 涉場は據るの戦闘ハ亦橋梁  
戦に同一あること多くとて此戦闘に在てハ攻  
伐兵の形勢尚ほ不便宜あるに於て異である而  
己いウんとおもはるハ涉場を渉るハ軍兵尚橋梁  
を踏るよても多く騒亂し及ぶハ其の上攻伐



兵ハ淺流を探索するを要すといへども橋梁の製作ハ由て自然ニ見ハるくものか

涉場中ニ銳利の物体を置たり或其涉場を掘りて此を渉る處あらば爲さん爲め守禦兵ニ例條するの規矩ハ稀ニ成就すること多うる處一志つとて是故ニ此を怠るを得

軍兵の布置と守禦の方法トハ此外橋梁戰ニ同しことありとそありとも守禦兵毎ニ淺流の後ニ布置するハ自然あり

第二百三十三章 守禦兵ハ務て永く涉場を攻

伐兵ニ隱さんことを務むるを要す是ニかゝる此守禦兵ハ涉場の在る所の處より攻伐兵の避けあさハさるやうニ此のことク其守禦の規矩を取るを要す是故ニ軍兵と砲類トハ攻伐兵他の沿河より此を見あさハさるやうニ此の如くニ布置するを要すととも兼て又砲兵ハ攻伐兵の近より一方て此を射撃し得るやうニ此のことクニ布置するを要す此時ニ一方て若し成る處くと或る砲を以て横合より淺流を射防し得るを要す

全沿河を縁ひて狙撃銃兵を布置するを要す是故に殊にハ總じて浅流に沿てこを布置するを要す此狙撃銃兵の時ハ河川を監察せんと思ふ處に敵の或るオピシーレンに照準するものか夜と間弁候對岸に在て監察を為さん為し渉場を渉す或此時に方て小舟を以て渡さるを得こまに遠路に用ふ處いとをいりんとかまハ弁候浅流を過て退却せよハ其浅流のもやうと場處とを敵に見らまけまハかす即千七百九十六年レーク地に在てけるる如し

沿河を縁ふるの合圖に就てプロイス人と晚近のヌレースウィークセの軍に多の利益を得けり第二百三十四章に渉場よての攻伐と毎に甚く死試戦の企に在りとを攻伐兵と先つ何方に浅流あるを探聴するを要す處に此時に方て沿河の住民を穿鑿し殊にハ漁人および舟人を穿鑿するを要す處に或守禦兵若し河川の此方の岸に野番兵や或弁候を置けけると死にハ不意に此軍兵を攻伐し且こまに由て彼を以て吾う目前に浅流を踰る

己を得さらしむるを要す志からさきハ夜中  
河川を監察せしむるを要す  
若し渉場の知悉であるに於ても攻伐兵其夜砲  
類を此渉場と對向して砲列と致し砲を以て攻伐を誘導  
就て砲を蔽陰せんや為し屢堤坊の助けを獲  
得るを望む朝とも直し砲兵を以て攻伐を誘導  
し得て是橋上の攻伐に於る如く去りて其  
功利十分ありと思はし且守禦兵其砲類を其陣  
地より退却しけるや否し歩兵先つ渉場を踏へ  
去りて彼方の沿河に確據を其後先つ他の兵

後繼をいふんとおき其兵ハ渉場を渉るを以て  
らばおき盈けきハあり  
騎兵の首塊ハ最後ハ河川を渉るあり河川中下  
流に小舟と筏算とを置くを要す是流水に流  
る兵士を救助せんを為かり其上或る騎兵を河  
川中流上に布置して流水の力を甚しく挫くを  
以て渡す  
レイン河にて千七百九十六年の軍役中渉場の  
周邊著明なる戦闘ありカムハク子 千ユリ  
インあるスト キイル氏の書中に見ゆ

第二百三十五章 堤坊陣地ハ堤坊の兩側ニ在  
る地形若シ水底ニ在るを以て通行を難ならし  
あてけると記シハ實ニ堅固なりと爲し得べき  
我ホルランド國の堤坊ニおぬひ多分ニあて得  
るう如し其地形若シこまニ反して乾燥の原野  
よて成ると記シハたとへ溝池を以てこまを斷  
絶しあるといへどもこまニ由てよく騎兵と砲  
兵とを用ふることを妨く難しおぬべきとも斯る  
地形ハ絶て歩兵を支へ以且こまニ由て此の如  
き陣地ハ其同勢を失ふこと多しと云

堤坊戰の替核々別して子ラテラランド國のオ  
ヒシールニ甚緊要のものなりと云いんとか  
はハ此オヒシール其本國の守禦ニ就て堤坊の  
主たるを屢敵と争ふを要を盡けしハかす志ヲ  
是ともてこまニ准するを要するの法則ニ甚單純  
ニして且多の注視ニおぬて又隘地戰の法則  
と同一かすとも  
第二百三十六章 守禦兵も亦堤坊の前ヲ上ク  
或後ヲ其陣地を取て得  
第二百三十七章 堤坊前の陣地ハ又最惡き陣

地とそ

是故一唯破格一就て而已こそを用ふるに志ありて若こそを十分一とするを要するに死一此陣地人工および天然一由て強むるを要するに第二百三十八章 若し堤坊上は陣地を取るを要するに死一ハ攻伐兵をして陣地を射撃せんし為其砲類を堤坊上は致す一己を得さらしめ且平地は在る砲臺よりハ斯ることを為しあはさるやう一此のことく隄防の首端より遠離して陣地を取るを要するに死一由て守禦兵ハ其

砲類を蔽陰せる陣地一布置しけるの利を具有するに死一といへども攻伐兵の砲類ハ蔽陰せしめて攻伐兵ハ守禦兵よりも多の砲類を堤坊上は布置しあはさるか守禦兵ハ胸墻より霰彈射の距離一して堤坊中一壕塹を掘らしむこそ其砲類の有功の及達中一攻伐兵を駐めん一為か若し湛水此壕塹を流通せざると死一ハたとへてかくかくもこそを掘らしむ守禦兵の或る狙撃銃兵ハ堤坊の兩側一沿て胸墻の後一布置す

堤坊若く一直縁に通せし尚ほ曲折を成せしと  
しハ此曲折を別々し守禦し得しとあらしめて時  
に岐堤の助けを獲得ししこと第二の一砲隊の  
設置し由て他の砲隊を射防せんを為し  
守禦兵若く一の砲隊をも具有せしと死しハ  
堤坊中胸墻の後しハ今其歩兵の在る所の其胸  
墻の前凡二百歩に堀切を為して敵の狙撃銃兵  
の此堀切中し根拠して守禦兵し點放せんと為  
しを妨げんし為し十分深く堀切らしむし  
堤坊し沿て在る人家と小森とハ自然禦守せる

やうし施備し且湛水堰ハ築造即横土堤を以て  
蔽護せるを要し  
第二百三十九章 堤坊の後し陣地を取るし方  
てハ守禦兵或る蔽蔭せる隘地し於るよし尚  
多く利ありしといふんとかきハ既し遙の距離  
して攻代兵を見るもへし其砲類の及達中し來  
るや否ししを射撃し得  
守禦兵今其砲類を布置せんし蔽蔭せる陣地の  
全長を過て射防し得るやうし其陣地中堤坊の  
尾端の後およひ其近くししを布置し其上側

傍に布置せるの或る砲を以て斜に攻伐兵を射撃せんことを務む敵堤坊上は縦隊に在る其間ハ實弾を以てこれを射撃せしむるとも其軍勢の張列せる方にて堤坊より脱出せるや否や霰弾を以て射撃を人家と小森と志して他の地形物とハ又歩兵を以て守備しあるか否と志しハ守禦兵の其他の所置ハ隘地の守禦に就て去へるゝ如く復又同一ことなりとせ

第二百四十四章 守禦兵若し堤坊前は陣地を取らざればとせハ攻伐兵難に課業を充るを要

を履しこき上は記載せる守禦兵の所置よりして十分は訓導せらるを得るなり是故に堤坊陣地は於る攻伐は此時期に在て甚危険なりとせ履し志して毎に戦士を血戦し費を履し是故に此陣地を環翼し得るとせは曾て直しこきを攻伐せるを要せし此時は方ては一方術をも試験かく施し得ざるなり

若し堤坊陣地を正面におわで攻伐せるを要する時とは是に就て次の規則に注意を履し戦闘ハ放砲を以て誘導せんことを務め一群の

撤兵と堤坊を縁て守禦兵の陣地と近よらんことを務め狙撃銳兵と敵の砲兵と點放し小なる攻伐縦隊と敵の點放の微弱とかるや否と堤坊を縁て迅速と陣地を攻伐せんう為と準備しあるか此縦隊と壅塞を除却せんう為の用器と堀切を埋めんう為の枝木を具せる土工兵あり同時と堤坊下を縁て撤兵と應援せらるこの此攻伐若し成就せると此と縦隊務て迅速と守禦兵を従ふか此と守禦兵後方と在る陣地中と確據せさらんう為か此と游軍歩兵と或る間

隙を以てバタイロン縦隊と在て後繼を志し是とも騎兵と返討せらるこの危険を全く遁とあるの前と堤坊上と赴さるか此と斯る攻伐と關陟せる難事と就ては夜間う或霧深に天氣の是を施行せんことを宜しとを茲と在てける堤坊戦の多の内とてハ殊と千七百九十六年アルコレ地と於る堤坊戦と其軍役中の紀事と就て見るに千八百零九年エヘルスヘルクと於る堤坊戦ハレット氏の記載よりして千八百三十一年オストロレンカ地の堤



坊戦ハホレシ地ニ於ル軍役中ハンレイ子  
ヘルト氏の史傳ニおわて見る所ナリ

幕氏兵論第二編應用兵法卷四 畢

早稲田大学図書館

011888007000